



主張

生徒が伸び伸び活躍する学校

白 杵 裕 世

授業中に生徒が自分の考えをみんなに発表している。その発表を聞いて別の生徒が自分の考えを発表しようとしている。本校では、生徒と生徒の関わりのある授業を構想し、展開したいと思っている。学校はみんなが学ぶところである。この学校という、多くの生徒が集い学ぶ状況をどれくらい有効に活用できるか、また活用しようとするかで学校の在り方自体が大きく変化してくると思うのである。

「友達の考えを聞いて自分の考えが深まった。」「友達の考えを聞いて友達の素晴らしさが新たに見つかった。」「自分と同じ考えの人がいて安心した。」「友達に自分の考えを認めてもらえてうれしかった。」「友達のがんばりを見て自分もがんばろうと思った。」など、生徒の授業後の振り返りカードや担任教師との連絡ノートにこのような感想が寄せられる授業や活動を意識して展開したいものだと思っている。

生徒と生徒が関わり合いのある授業や活動は、生徒同士や生徒と教師の関係がぎくしゃくしていたのでは生まれない。生徒同士の関わり合いは安心感や精神的な安定感のある中で生まれると思われる。また、集団に対して肯定的な思いは、お互いの思いを更によりよい方向へ高めることにつながり、その思いは保護者へも伝わることになる。保護者は生徒

(2)

の思いを受け止め、学校の諸活動を好意的に受け止めることとなり、その思いは生徒に伝わる。ここにいわゆる「好循環」の状況が形成されることとなる。

学校への信頼は日常の積み重ねの中から生まれてくると考える。学校の日常を支えているのは本校の先生方であり、校長の役目はその先生方の活動を見守り、成果を喜び、また、共に当事者として課題を共有して一緒に悩み、一つの方向性を打ち出し解決策を見い出していくことだと思う。

P D C Aサイクルによる学校評価と学校改善が定着してきている。その中で、学校が変わっていくことで学校は生徒、保護者、地域の信頼を深めている。計画し、実行し、チェックして、次の行動を起こしていく流れの中で学校の取組が評価されてきているように思う。ある日、街の掲示板で次のようなことばに出会った。「思いをもって、やってみて、できていることを確かめて、さらに励む」これもP D C Aサイクルだと思った。

P D C Aサイクルはできていないところをきちんと見極めて対策を講じようとしている。街の掲示板は、「できていること」が認識できれば「さらに励む」勢いが生まれることを教えてくれている。いずれの視点も大切だと思う。

学校の信頼は、多くの生徒の中で一人一人の生徒が自分の持ち味を発揮して伸び伸びと学校生活を送れることで成り立っていく。本校では学校評価の資料として、生徒・保護者・地域の方のアンケートを実施している。その中に「授業(学校)は楽しく充実していますか」「学級は授業を受ける雰囲気がよく、勉強もしやすいですか」という項目がある。ここでは私たち教職員が「学校は多くのみんなと学ぶところ」の意識をもって授業を展開したり、活動を支えたりしているかが問われている。

(全日中副会長・山口市立小郡中学校長)

(3)